

平成28年度 地域志向教育研究プロジェクト推進事業 事業報告書

	5		
①プロジェクト名称:	街の達人発掘・発展学習プロジェクト		
②プロジェクトメンバー:			
学部学科・所属部署	氏名	役割	
基礎教育部 修学基礎教育課程	金光 秀和	リーダー	
基礎教育部 修学基礎教育課程	吉道 悦子	サブリーダー	
基礎教育部 修学基礎教育課程	東 俊之	メンバー	
産学連携推進部 連携推進課	中山 尚武	事務担当	
③プロジェクトへの参加者数 (補助期間終了時)			
学部1～3年次生	研究室所属学生 (大学院生含む)	外部参加者数	
10名	3名	10名	
④関連した主要授業科目名			
授業科目名	対象学年	必修・選択	対象学科
人間と哲学	1、2年	選択必修	全学科
	主な特徴：授業の一環として、達人による特別講演会を実施。また、授業を公開して地域の方々と学生が共に学ぶ場を創出した。		
授業科目名	対象学年	必修・選択	対象学科
組織経営	3年	選択	情報フロンティア学部経営情報学科
	主な特徴：授業を公開して地域の方々と学生が共に学ぶ場を創出した。また授業の中で本プロジェクトの活動を紹介したり、各種イベントへの参加を促したりした。		
授業科目名	対象学年	必修・選択	対象学科
ドイツ語圏と日本	1、2	選択必修	全学科
	主な特徴：授業の中で本プロジェクトの活動を紹介したり、各種イベントへの参加を促したりした。		
⑤事業概要 (800字以上1000字以内)			
<p>平成27年度に引き続き、本プロジェクトは、偉大な科学者・技術者や哲学者を輩出し、また学生と市民とが交流してきた歴史を持つ石川の地で、学生と市民が科学・技術や哲学などさまざまなテーマで議論し、共に学ぶ場を創出します。</p> <p>地域住民の中にはそれぞれの分野で達人と言われる方が埋もれています。本プロジェクトでは、<u>学生が主体となって</u>、①街の達人を探しに行き、②コンタクトを取り、交渉し、③旧ロゴスやアントレプレナーズラボ、23号館などでテーマを設定して座談会や勉強会を開催します。</p>			

平成 27 年度に引き続き、今年度もこうした活動を行います。こうした活動は、本学のオナーズプログラムとして実施してきた、『哲学』を通じた教養の向上プロジェクト（夏目）や「技術者のための経営知識向上プログラム」（東）を学外へと拡大するものと言えます。学生は、市民と議論する場を持つことによって多様な視点を獲得でき、それを今後の学内外の活動にいかすことができます。また、このプロジェクトの運営を経験する中で、学生は、企画・立案力、さらには交渉力という「総合力」を学ぶことができます。「世代を超えて、地域の方々とどれほどの話ができるのか？」と学生はおそらく考えさせられることとなります。こうした経験が人間力の養成につながると考えられます。さらに、ここで培われた人とのつながりや学生の力は、地域との対話という形で卒業後も地域の活性化に貢献することが期待されます。

一方、地域住民にとっては、若い学生に接することで、人材育成・社会貢献・地域貢献という価値を見出すことができます。あるいは、自分の取り組みを他者に語ることによって、自身の新しい価値を見出すことができるでしょう。平成 27 年度には教員が主体となって街の達人に正課の授業に参加してもらいましたが、今年度は④学生が探し出した街の達人の中から本学の正課の授業に参加していただける方を発掘することも目標とします。そうすることによって、課外だけでなく正課の授業においても、地域連携・アクティブラーニングを推進することにつながり、何より教室の雰囲気が一変するはずで

さらに、今年度はこぶし会と連携して、本学の卒業生の中から達人を発掘して、発展学習の場を設けるとともに、学生が自らのロールモデルを発見する場を創出します。

⑥地域志向教育研究プロジェクトの活動実績

●街の達人調査隊の実施

街の達人発掘隊として、「VOL. 1 ミュージアムツアー in Kanazawa」を平成 28 年 6 月 11 日（土）、「Vol. 2 金沢のまちあるき～文化・伝統・建築～」を平成 28 年 12 月 10 日（土）に開催した。Vol. 1 ミュージアムツアー in Kanazawa では午前「金沢ふるさと偉人館」を訪れ、学芸員の増山仁氏の解説を聴きながら館内を巡った。参加した 10 名の学生達は増山氏の解説に熱心にメモを取りながら聞き入り、金沢の偉人の活躍について興味深く知ることができた。午後は、①鈴木大拙館をめぐるコース、②伝統産業工芸館をめぐるコース、③ロックの殿堂ミュージアムジャパン・金沢蓄音機館をめぐるコースに分かれて調査を実施した。今回参加した学生は全員が石川県外の出身であり、このツアーによって金沢の偉人・達人の情報を収集し見聞を広げることができたのはもちろん、特に1年生にとっては金沢の街を散策する良いきっかけにもなったようである。



Vol. 2 金沢のまちあるき～文化・伝統・建築～では、はじめに鈴木大拙館を見学し、金沢出身の仏教学者である鈴木大拙の偉業に触れた。参加した 6 名の学生の中には、名前は知っていても詳しくは鈴木大拙に知らなかった学生も多く、金光の解説を聞くことで新たな学びを得た学生もいたようである。また、特に建築系の学生は谷口吉生が設計した建築に見入っていた。次に、金沢能楽美術館を見学して、「加賀宝生」の歴史に触れた。中には、観光ボランティアガイド「まいどさん」の説明のもと、本物の能面を実際に着用することを体験して、どのような人がよく訪れるのかなど、観光ガイドという街の達人に質問する学生もいた。続いて東山方面に向かい、金沢菓子木型美術館（森八）を見学した。落雁を

作る際に用いられる菓子木型が藩政時代からのものを含めて千点以上展示されており、伝統的な菓子作り技能を感じることができた。また、美術館の作りが外国人観光者を意識したものになっているのではないかという意見を述べる学生もいたりして、そのような視点にも「達人の取材」という本ツアーの特徴を見ることができた。最後は、ひがしやま荘を訪れて、陶芸家であるマイケル・ケリー氏に話を伺った。学生は事前に「取材・記事の書き方」に関する講習会（後述）を受講しており、ひがしやま荘というシェアアトリエのこと、ケリー氏の作品のこと、彼が運営する AKASHU というクラフトショップのことなどについて質問した。ケリー氏には本プロジェクト主催の講演会&座談会にも参加してもらったことになったが、本ツアーはその事前準備ともなったようである。

参加者に向けたアンケート結果によると、vol.1、vol.2 ともに満足度は 100%となっており、今後行ってみたい施設なども集めることができた。このような催しの需要を感じることができた。現地を訪れてその町の歴史・文化を学ぶことは柔軟なモノの見方を身につける上でも大切なことであると思われる。今後も達人調査隊を実施していきたいと考えている。

●特別講演会・講習会の実施

特別講演会として、株式会社シェヘラザード代表取締役の坂本祐央子氏をお招きして、「ファシリテーターの達人に聞く『質問力』の極意」を前学期(5月16日・月)、後学期(11月15日・火)に1回ずつ実施した。この講演会は「人間と哲学」の授業の一環として実施したものであったが、授業を履修していない学生や外部からの参加者も参加して質問力の極意について興味深く学ぶことができた。特に、質問には、クローズな質問、オープンな質問、自分のための質問、相手のための質問があり、それぞれの質問の種類がもつ意義や使い分けについて学び、質問を「深め」、「広げる」といった、相手から話を引き出すスキルを学んだ。

また、後学期には、有限会社ライターハウス専務取締役、竹本鉄雄氏に「『取材・記事の書き方』の極意」と題して、導入編(12月8日・木)、実践編(12月14日・水)の2回にわたって講習会を実施した。導入編には学生7名、実践編には学生9名が参加した。導入編では、取材の心構え、話の聞き方といった一般的なことから、座る位置、ノートの取り方、文章の構成方法など具体的なノウハウまで座学中心に知識を得ることができた。実践編では、「伝統工芸・クラフトの達人 講演会&座談会」(後述)での取材を想定して、具体的な質問の仕方を学び、またロールプレイで実際のインタビュー方法について学んだ。アンケートによると、導入編・実践編ともに8割~10割の参加者が達人発掘の仕方・取材の仕方を理解することができたと回答しており、「少人数制で、質問の方法やカメラの撮り方などをじっくり学ぶことができてとてもよかった」という意見が多く見られた。

自分が興味をもって見たり、聞いたりしたことを改めて他人に伝えるには、そのための訓練が必要であり、これらの講演会や講習会はそれらを身につける良い機会になったと思われる。



●伝統工芸・クラフトの達人 講演会&座談会の実施

12月22日(金)に、金沢の伝統工芸・クラフトの分野で活躍する達人を招き、講演会・座談会を実施した。この座談会は、プロジェクトメンバーがテーマの設定から企画したもので、今回は加賀水引職人の津田六佑氏(津田水引折型)、加賀友禅作家の毎田仁嗣氏(毎田染画工芸)、陶芸作家のマイケル・ケリー氏を講師としてお招きした。講師の方々と学生が双方でコミュニケーションをとれるように、3人にそれぞれ簡単に講演をいただいた後は座談会の形式として、学生自らが達人に質問・取材をする時間とした。学生9名、一般2名、教職員4名、合計15名の参加者であったが、学生は自分の専門分野とも関連付けた質問をするなど、さまざまな分野の「ものづくり」に関連する話を聞くことができた。また、この中の3人の学生が、講習会・座談会を経て、最終的に今回の座談会にお招きした3人の達人について記事をまとめることができた(後述)。

地元の出身の学生でも初めて知ったこともあるようであり、地域の魅力を再発見する良い機会となったと思われる。



⑦地域志向教育研究プロジェクトの具体的な成果

●日本工学教育協会主催「工学教育研究講演会 第64回年次大会にて成果発表

経営情報学科3年の山田陽樹君(以下山田君)が、これまでの活動実績について、9月5日(月)に大阪大学で行われた公益社団法人 日本工学教育協会主催「工学教育研究講演会 第64回年次大会プログラム」で研究発表を実施した。

山田君は平成27年度以降、本事業で行っている多数の特別講演会に参加し、知見を深めてきた。その上で、地域の「達人」を探し出し、数多くの取材を通して「達人」を紹介する記事をまとめあげた。今回の学会ではその様子を、金沢工業大学が取り組んでいる地(知)の拠点整備事業(COC事業)に言及しつつ発表した。

工学教育研究講演会といえば、理工系の発表が多く行われる場であり、今回のプログラム名も、「理工系人材育成のための工学教育」という題目になっている。「街の達人発掘・発展学習プロジェクト」では哲学や文芸など人文系のフィールドで活動することが多く、この観点から一見すると、本プロジェクトは理工系とは関係性が薄いように感じるかもしれない。

しかし、山田君は経営情報学科でマーケティングなどの分析手法を学ぶとともに、プログラミングも駆使して他のプロジェクトでホームページを作成する等、理工系に秀で



ている。そのうえで人文系の本プロジェクトに参画することで、総合的な実力を身に付けようとしているのである。したがって、今回の工学教育研究講演会では、先に述べた活動実績について、「理工系の学生が人文系プロジェクトに取り組んで学ぶことができたこと」という視点から発表を実施した。理工系や人文系、と系統立ててしてしまうのではなく、それぞれの持ち味をクロスオーバーさせた魅力—理工系・人文系を問わず必要な、総合的な人間力はたしかに本学の教育が目指しているところである。なお今回山田君は、工学教育研究講演会の座長も務め、彼自身さらにさまざまな経験を積むことになったようである。

●季刊誌『達人』2016年 夏号および秋・冬号の刊行

本プロジェクトは平成27年度から活動しているが、昨年度の活動報告フォーラムで活動を報告した際に、冊子にするなど達人発掘の成果をまとめあげるものがあつた方がよいのではないかとの意見をいただいた。そうした意見も踏まえつつ、今年度は、季刊誌『達人』2016年を夏号と秋・冬号の2号刊行した。

夏号では、前述の街の達人調査隊 Vol. 1 の調査をもとに、3人の学生が金沢の偉人についてさらに調査をして、それを紹介する記事を執筆した。

秋・冬号では、街の達人調査隊 Vol. 2 の調査、金沢の伝統工芸・クラフトの分野で活躍する達人を招いた講演会・座談会での取材をもとに、3人の学生が伝統工芸・クラフトに携わる職人の記事を執筆した。

自分が興味をもって見たり、聞いたりしたことを改めて他人に伝えるには、グループワークなどとは別のコミュニケーション力が必要となる。このプロジェクトでは、企画力や発信力を含めた広いコミュニケーション能力の涵養を目指しており、執筆した学生たちにとってそれらを身につける良い機会になったと思われる。

⑧次年度以降の活動予定

定期的に座談会や勉強会を開催することによって、学生が能動的に学ぶ機会、しかも狭い意味での専門分野だけでなく、それと社会との関わりを学ぶ機会をもつことができる。今後も達人と呼ばれる方々にそのような座談会や勉強会（場合によっては授業）への参加をボランティアでお願いし、学生と地域住民が共に学ぶ場をもつことができると考える。

また地域の魅力の再発見という点では、達人発掘ツアーは大変有益であった。今後も定期的を開催する予定である。

最後に、必ずしも達人発掘ではないが、本学が掲げる「共創教育」として、「人間と哲学」や「組織経営」などの授業に社会人共学者を積極的にお呼びし、学生と地域住民が共に学ぶ場を継続的にもち続ける予定である。